

甲南大学 総合研究所報

甲南大学総合研究所

神戸市東灘区岡本3-9-1 電話(078)431-4341

総合研究所開設記念講演会を開催

昨年11月30日、午後2時30分から10号館1階講義室で京都大学教授河合隼雄氏の記念講演会が開かれ、終了後同8階第7会議室でレセプションが行われた。

「日本人とアイデンティティ」と題した河合教授の記念講演の要旨を本学文学部講師森茂起氏にまとめていただいた。



「日本人とアイデンティティ」

河合先生の御講演は、多数の聴衆を魅了し、時間に限りがあるのが惜まれるほどでした。

まず、先生は、エリクソンの理論で有名なエゴ・アイデンティティについて説明され、その考え方が、西欧の男性の自我(エゴ)を前程としており、日本人にそのまま適用できないことを述べられた上で、西欧において最近見られる自我の見直しへの動きを紹介された。その動きの一つは、女性から提出されたもので、女性の意識は、男性の意識とは異っているが、決して劣るものではないという主張である。もう一つの動きは、自我の発達を最終目標とする従来の発達観への根本的な疑問で、その結果「無我」について語っている東洋の思想から学ぼうという傾向が起っている。西欧の日本への関心の強さを先生自身の体験から述べられた。

次に、日本人の意識の特質について述べられ、そ

れが極めて場依存であり、西欧のように、いったん他から切り離された自我を確立した上で、結婚によって再結合するという発達プロセスが日本にはないことを強調された。そして、日本と西欧のおとぎ話を比較して、西欧では「結婚」のテーマが最も中心であるのに対し、我が国では、「浦島太郎」に見られるように「自然の美」が重要であると述べられた。

最後に先生が強調されたのは、現在、自我に行きづまり、「結婚」のシンボルを失なった西欧の人々が日本から学ぼうとしているが、我々のシンボルであった「自然の美」もすでに失なわれていることである。それゆえ、日本が彼らに何かを教えられると考えたとしたら誤りであり、我々は逆に、もう一度西欧と本格的にぶつかっていくことが必要であると、海外での見聞を紹介されながら強調された。

以上のような主旨の中に、豊富なエピソードとユーモアを交えられ、笑いの中に多大の感銘を与えられた講演会でした。

昭和59年度共同研究中間報告

「平生鈆三郎の日記」に関する基礎的研究

研究チーム 三島 康雄・杉原 四郎
安西 敏三・柴 孝夫

①研究内容の概要と特色

甲南学園の創設者である平生鈆三郎は、大正2年(1913)から昭和20年(1945)にいたる間に、かなりくわしい日記をつけている。本研究は、この平生日記を中心的な資料とし、その他に公刊されている文献を併せて利用し、平生の多面的な社会活動を研究することを目的としている。平生鈆三郎については、これまで伝記が刊行されている以外に、あまりまとまった研究はなく、資料を十分に利用した本格的な学問的研究は、今回が初めてである。

平生は甲南学園の創設者として教育活動に従事した以外に、東京海上火災保険株式会社の専務、株式会社川崎造船所や日本製鉄株式会社の社長として、日本近代経営史上に偉大な足跡を残した。さらに社会改良主義者、カナモジ主義者、自由通商協会の重要人物としても特異な活動を行い、また文部大臣、大日本産業報国会会長として、政治的活動を行った。このような平生の多面的活動を研究するには、多数の研究者による共同研究がふさわしいのである。

②研究分担

三島康雄は、平生の最も主要な活動である、東京海上火災保険株式会社の重役としての、経営者活動の研究を行う。

杉原四郎は、平生の経済思想、とくに自由通商協会のメンバーとしての活動を研究する。

安西敏三は、平生の政治思想ならびに教育理念について研究を行う。

柴孝夫は、平生の株式会社川崎造船所ならびに日本製鉄株式会社の社長時代の経営者活動の研究を行う。

③研究の経過

イ. 資料の整備

甲南学園によって解読された「平生鈆三郎日記」および「平生鈆三郎講演原稿」を、すべて2部づつ複写し、合計70冊に製本した。また甲南大学の学園史資料室に保管されている諸記録の中から、重要と思われる資料を複写した。

ロ. 資料の蒐集

杉原は仙台、東京、三島と安西は東京に出張し、

平生の関係者からヒアリングを行い、また関係資料を一橋大学や国会図書館で蒐集した。

ハ. 研究の進捗

各研究者は分担テーマに従って、平生日記を読み、研究を開始した。また

三島……大正2年～大正14年

杉原……大正15年～昭和4年

柴……昭和5年～昭和12年

安西……昭和13年～昭和20年

の時期を分担して、平生の新しい年譜を作成することにした。

ニ. 研究会の開催

昭和59年の7月と9月に甲南大学で研究会を開催して、報告を行った。また60年2月に有泉閣(私学共済保養所)で合宿して、今年度の研究の総括と来年度の研究の打合せを行った。

ホ. 来年度の研究予定

各研究者がテーマに従って研究を進め、3回の研究会を行い、61年3月に各自150枚(400字詰)の原稿を提出し、同文館出版株式会社から「平生鈆三郎の総合的研究」(仮題)を出版する。

さらにこれとは別に、平生の講演原稿から重要なものを選び、「平生鈆三郎の思想と理念」(仮題)を編集して、可能ならば出版する。

ピアノ自動演奏システムの作成と 音楽表現の定量的分析

研究チーム 田口 友康・藤原 儀直
太田 雅久・森 茂起

昨年11月に研究チームを発足させ、現在までほぼ当初の計画通り研究を進めてきている。以下にその要約を報告する。

(1) 自動演奏システム ホストコンピュータ PC 9800と電子ピアノ pf15を結ぶための装置(ピアノ・インターフェイス)を完成し、その技術的な詳細(機能の事前評価を含む)を本学理学部紀要第32巻1号(1985年)に“Decoder with register feedback for computer-aided music of electronic keyboard instrument”として報告した。また自動演奏用のソフトウェアについては、先行研究として行なっていた旧版の言語文法を大幅に拡張し、PC 9800システム上で動くコンパイラを作成した。新版の言語による

と、音楽表現の主要な要素とされるダイナミクス(音量変化)とアゴーギクス(テンポの揺れ)を精密かつ相当自由に指定することができる。

(2) 実演奏の計測分析 ヤマハピアノ自動演奏システム用として市販されているディスクから演奏データを読み取って分析することを開始した。(ヤマハのシステムは、人が演奏したものを収録してそれを無人で再演奏する装置であり、我々のようなプログラム化自動演奏とは異なるものである。)「一般化メトロノーム数(仮りの命名)」という指標を導入し、これによって試験的に一例(専門家の演奏によるバッハのイタリア協奏曲)を分析したところ、見事に制御された精妙な微細構造をもつアゴーギクスがつけられていることが観察された。このようなデータは、演奏家による演奏行為(すなわち楽曲解釈)の定量的な記述そのものとして興味あるばかりでなく、プログラム化自動演奏での音楽性の獲得を考える上で大きな意味をもつと考える。

(3) 音楽的テンポの心理学 音楽的テンポ(いいかえれば「自然な、または音楽的な」アゴーギクス)の感覚はどの程度個人差をこえて存在するかを研究することが我々の共同研究の出発点であるとともに目標でもある。本年度全4回開催した定例研究会はほとんどこの議論に費やした。一つの短い楽曲主題について音楽大学の学生82名に試行的に心理テストを実施したところ、ある特定のアゴーギクスに強い選好性を示すことが判明した。この心理テストとあわせて、同一の主題を使ってメトロノーム的に正確なテンポの知覚力をもテストしたが、厳密なテンポよりも「よい」音楽的テンポの方向へ幾らか偏った演奏を正しいと知覚するという結果がでた。なおこの実験データは(1)に報告した自動演奏システムで作成した。

以上の研究経過をもとにして次年度の目標を次のように設定する。

- (1) MUSE システムについては、楽器をピアノにしたシステムを構築するとともに、アーティキュレーションの微妙な表現まで可能にする言語機能をさらに付加し、またシステムの対話性を一層向上させる。
- (2) 実演奏の計測分析については、複数例計測して事例研究としてまとめるとともに、できればジャンル別(古典派、ロマン派等)の音楽的な特徴の定量的把握にまで進む。
- (3) 音楽的テンポについては、理論的な枠組みを設

定し実験を精密化した上で事例研究としての結果を得るとともに、そのなかから音楽心理学上の一般原理として帰納し得る要素を抽出すべく考究する。

以上

医用高分子材料の合成と評価

研究チーム 西野 潤・玉置 克之
久後 行平・増田 秀雄

1. 緒言

近年、種々の生物医学用高分子材料の開発が盛んであるが、なかでも特に多相系高分子材料は、その良好な生体適合性のため注目されている。

そこで我々は、タンパク質モデルとして多数の研究例のあるポリ(γ-ベンジル-L-グルタマート)(G)をA成分、既に医用材料として実用化されているポリエチレンオキシド(O)あるいはポリジメチルシロキサン(S)をB成分とする新規のABA型ブロックポリマーの合成を試みた。¹⁾さらに細胞培養実験を行ない、基質である試料膜に対する細胞接着および増殖挙動から生体適合性を評価し、基質の表面構造との関連性について比較検討を加えた。²⁾

2. 実験

ミドルブロック成分の合成は、市販のポリエチレンオキシド(PEO)の両末端OH基を、塩化メチレン溶液中で塩化トシルでトシル化し、次いでフタルイミドカリウムを添加し、約120℃で3時間攪拌後、抱水ヒドラジンを添加し還流することにより、両末端を第一級アミノ化したATPEOを得た。両末端を第一級アミノ化したポリジメチルシロキサン(ATPDMS)は、市販品を用いた。アミノ化率は、過塩素酸酢酸溶液による滴定から決定した。ペプチド成分であるβ-ベンジル-L-グルタマート(β-BLG)-NCAは、ホスゲン化法により合成し、再結晶法による精製後、上記ミドルブロック成分の両末端より重合させることによりABA型ブロックポリマーを合成した。分子量および分子量分布は、GPCにより決定した。細胞は、ヒト子宮頸部癌由来のHeLaS3細胞を用いた。培養実験では、10%の牛胎児血清を含むEagleのMEM培地に0.25%トリプシン溶液により単離させた細胞を浮遊させ、 1×10^5 cells/mlとした。予めエチレンオキシドガス滅菌しておいたブロック膜を入れたシャーレ中に上記培地を入れ、細胞濃度を 5×10^4 cells/cm²として、

37℃に保った5%炭酸ガスインキュベータ中で培養した。細胞の付着状態の変化は、位相差顕微鏡により観察した。また、形態観察のため、所定時間後2.5%グルタルアルデヒド溶液にて4℃、1時間前固定した。次にリン酸緩衝液で洗浄後1%オスミウム酸で後固定し、再びリン酸緩衝液で洗浄後エタノール系列で脱水した。さらに酢酸イソアミルにて置換後、臨界点乾燥を行ない、走査型電子顕微鏡（日本電子JSM-35C）観察用試料とした。

3. 結果および考察

ミドルブロック成分であるATPEOとATPDMSのアミノ化率は、各々1.98と1.99であり、ほぼ完全に両末端がアミノ化されていると考えられる。GPC測定の結果、前者の $M_w=4,000$ 、 $M_w/M_n=1.33$ 、後者の $M_w=5,300$ 、 $M_w/M_n=2.04$ であった。合成結果は第一表にまとめて示した。A (mol-%) は外側ブロック成分であるPBLGのモル組成であり、 M_w は数万程度のものが得られた。 M_w/M_n は何れの場合も約1.8前後であり、比較的シャープな分子量分布のものが合成された。さらに、熱力学的考察のため、拡張Fowkes式とYoungの式、およびDupreの式から誘導した式に接触角のデータを代入して最小自乗計算を行った結果、GSGブロック膜の固体表面張力として32~33 dyn/cmを得た。この値は、PBLGとPDMSの各値の間にあたり、これらGSGブロックポリマー膜表面が同様のマイクロ相構造を有することが示唆された。さらに両成分の界面張力 $\gamma_{AB}=19.0$ dyn/cmより、PBLG成分上へのPDMS成分の拡張に対する拡張係数 S として-53.4という大きな負の値が得

られた。この結果と前述の固体の表面張力値からGSGブロック膜表面は、PDMS成分により富むマイクロ相構造を有していると考えられる。

次にシャーレ中での細胞培養実験において、細胞の各試料膜上への初期接着の形態を比較するため、植え込み3時間後に固定処理を行ない、走査電顕により観察したところ、PBLG膜上では偽足が伸び異形化が進み、さらに伸展し偏平化する傾向が多く見られた。一方GOG-5およびGSG-1ブロック膜上では、PBLGに比べて伸展および偏平化の程度は小さく、特にGOGの場合は偽足形成が抑制され、球形のままの傾向が観察された。一方、コントロールとして細胞培養用のFlowのマルチディッシュを用いたが、その上では初期から著しい伸展、偏平化傾向みられ、細胞表面上には微細な絨毛状の突起が認められた。また、細胞増殖性を検討するため、細胞数の経時変化を測定した。細胞植え込み17時間後におけるコントロール面上での細胞数に対する各試料膜上での細胞数の割合を初期増殖率とすると、PBLGでは106%、GSGおよびGOGでは約70%前後であった。

PBLG上の細胞増殖傾向はコントロールとほとんど同じで、比較的良好であった。GSGの場合、初期増殖率はコントロールに比べ低いが、48時間後ではほとんど同じ値が得られた。これは、PDMSの細胞粘着性が低いことを考慮すると、多相系にすることにより、適当なかさで熱力学的に考察されたドメインサイズをもつマイクロ相構造が形成され、細胞粘着の足場として改善されたものと考えられる。一方GOGの場合、初期増殖率はGSGと同程

Table 1 : Molecular characterization of A-B-A tri-block copolymers composed of PBLG (A) and PEO(B) or PDMS (B).

| Designation | A(mol-%) | P_A | $M_w \times 10^{-4}$ | $M_n \times 10^{-4}$ | M_w/M_n |
|-------------|----------|-------|----------------------|----------------------|-----------|
| GOG-1 | 35.6 | 25 | 1.5 | 0.8 | 1.88 |
| GOG-2 | 48.8 | 44 | 2.3 | 1.0 | 2.30 |
| GOG-3 | 68.4 | 98 | 4.7 | 2.6 | 1.81 |
| GOG-4 | 77.4 | 155 | 7.2 | 3.8 | 1.89 |
| GOG-5 | 85.9 | 276 | 12.5 | 7.2 | 1.74 |
| GSG-1 | 63.2 | 61 | 3.2 | 1.8 | 1.78 |
| GSG-2 | 70.2 | 84 | 4.2 | 2.0 | 2.10 |
| GSG-3 | 71.4 | 89 | 4.4 | 2.5 | 1.76 |
| GSG-4 | 72.4 | 93 | 4.6 | 2.5 | 1.84 |
| GSG-5 | 75.0 | 107 | 5.2 | 3.2 | 1.63 |
| GSG-6 | 81.3 | 155 | 7.3 | 4.1 | 1.78 |

度であるが、その後ほとんど増殖は抑制されている。GOGでは、ポリエチレンオキシドが親水性であり、ハイドロゲル化し細胞培養の足場として軟弱であり、さらに細胞表面の多糖鎖が形成するハイドロゲルのため相互作用が弱く接着しにくい、すなわち増殖が抑制されるのであると考えられる。以上の結果、GSGブロックポリマーは細胞の生着および増殖の足場材料として優れていること、またGOGブロックポリマーは、細胞の接着性を抑制し、且つ組織適合性に優れた多相系高分子材料であることが示唆された。

文献： 1) 久後、大路、西岡、玉置、西野、Polymer Preprints, 32, 1835(1983). 2) 久後、大路、西岡、中野、玉置、西野、ibid, 33, 511(1984). 3) K. Kugo, K. Tamaki, and J. Nishino, 1st SPSJ Internat. Polymer Conference, 137(1984). 4) K. Kugo, K. Tamaki, and J. Nishino, China-Japan Bilateral Symposium on the Synthesis and Mater. Science of Polymers, 265(1984).

経済システムにおける 数理モデルの分析と手法

研究チーム 中山 弘隆・大野 勝久
小林 清晃・佐藤 治正

初年度においては、経済システムにおける数理モデルとして交通市場及び電気通信市場の分野に焦点を当て、政策上の問題を考えるためのモデルを定式化し分析を試みた。その分析手法として数理計画法を適用したが、手法上の限界が分析の枠を制約することになるのは当然である。したがって、分析手法の開発が必要となり、それがモデルの開発と並行的に行われた。次年度においては、さらにモデルと分析手法の継続的开发に努めるが、上記市場に関連する諸問題の政策インプリケーションを引き出すためのシミュレーション分析を試みる。

そのひとつは、道路投資の最適政策を考えるための動学的最適化モデルを定式化および分析である。その結果が、「道路投資計画のための最適化モデルとその分析」(甲南経済学論集、Vol.25、No. 3、1985年2月)である。自動車交通における混雑現象を積極的に考慮するとき、混雑と道路投資のスパイラル関係を指摘できる。すなわち、混雑の度合を低下させるために道路投資をし、その道路投資が交通需要を刺激し交通量を増加させ、再び混雑度が高ま

る。そこで、このようなスパイラル構造を組み込んだモデルを設定して、自動車交通による便益を最大化するための最適道路投資政策をさぐるための動学的モデルを定式化した。そのモデルの分析には、数学的手法としてPontryaginの最適制御理論を適用した。その結果、道路投資政策に関するいくつかの興味ある命題が導かれる。たとえば、強いスパイラル構造がある場合には、道路投資をしても混雑の解消は一時的なものに過ぎず、かえって、交通需要を刺激し混雑の広がりを大きくするために結果的には、便益の低下を導く。この命題は、道路投資に対して否定的な政策を示唆する。

次に、1970・80年代における政治・経済的諸条件の変化を背景に米国を中心に規制緩和政策が進展しつつある、電気通信市場並びに航空市場に注目した。このような政策のドラスチックな変更直面した今日、政策変化が市場の成果に与える主要な効果を分析し予測可能とすることが重要であり、そのための分析モデルの開発と政策シミュレーションの実行が必要とされる場所である。以上のような認識の下に、初年度においては規制政策に関する経済分析モデルの主要論文を整理し、新たな市場環境の変化を説明可能とする分析モデルの開発を試みた。これらのモデルは社会的最適解と非規制市場均衡(ナッシュ均衡)解とを比較することにより、規制緩和政策の成果を考察するものである。また次年度においては、確率分布を分析に取り込み具体的な数値データを用いることにより、シミュレーションを実行可能とする方向に分析を進める。

他方、分析手法に関しては、多目的計画法とマルコフ決定過程に基づく政策反復法の分野における開発が試みられた。

多数の目的関数を最大化もしくは最小化しようとする場合、すべての目的関数を同時に最適化する解は一般には望めずここに解のトレードオフが必要となる。対話型多目的計画法は、煩雑な最適化計算をコンピュータにやらせながら、意思決定者のトレードオフ判断を助けて解の探索を行おうとするマン・マシンシステムのソフトウェアである。このようなソフトウェア開発にあたっては、機械と人間の果す役割をうまく分担させることが重要である。このような観点にたって、近年、筆者は満足化トレードオフ法を提案した。一方、パーソナルコンピュータの急速な発達に伴い、経済システムにおける意思決定でも、パーソナルコンピュータを積極的に活用

する機運が高まってきている。現在、大型計算機用に開発された満足化トレードオフ法のプログラムをパーソナルコンピュータで動かせるように改良を行っている。

有限個の状態をとり、各状態で有限個の決定をとりうるマルコフ決定過程におけるアルゴリズムとしては、政策反復法、線形計画法、逐次近似法の3手法が知られており、特に政策反復法は最も標準的な手法とされている。有限マルコフ決定過程として定式化あるいは近似できる実際問題としては、工学、経済学の各分野にわたって多様な問題があり、たとえば、最適確率制御問題、計算機・通信システムの最適制御、最適在庫管理、ポートフォリオ等である。しかし、これらの問題は通常多状態問題となり、政策反復法で解くのは容易でない。これは政策反復法が政策改良、値決定の2ルーチンの繰り返しで構成され、値決定ルーチンにおいて少なくとも状態数の次元の連立一次方程式を解かなければならないからである。この値決定ルーチンを連立一次方程式の有限回の逐次近似でおきかえた手法が修正政策反復法であり、この手法の収束を示すとともに、実際問題にたいしてその有効性をたしかめている。

ECにおける多国籍企業経営と 政府規制に関する研究

研究チーム 加藤 恭彦・萩野 典宏
林 満男・山口 賢

首記の研究課題について、特に、「ECの形成・発展過程と多国籍企業の成長」、「経営戦略と国際労働運動との関連」、「EC諸国における政府規制に関して、特に連結決算に関する法的規制と資本会社の年度決算書類、株式会社の構造とその諸機関の権利・義務、年度決算書類の法的監査制度との関連」等について主に検討してきた。

加藤研究員は、EC諸国における資本会社の年度決算書類の体系と表示様式、評価原則、公開制度と中小企業の特例（以上は第4号指令—資本会社の年度決算書類—）、EC加盟国の株式会社の構造（特に会社の管理機関の構造）、監査役員・取締役会制度（以上は第5号指令—株式会社の構造およびその諸機関の権利・義務—）、さらに、ECにおける公認会計士監査制度（特に監査人の人的基準の標準化問題）と第8号指令（資本会社年度決算書類の公認会計士の資格）について研究している。以上のEC

理事会指令を受けて加盟国は自国の会計諸法を改正しなければならないが、西ドイツでは1983年6月3日付に商法の「政府法律草案」が公表され、現在では1983年8月26日付で「新政府草案」が連邦議会へ提出されて、いまだ確定されないままの状態で今日に至っている。

萩野研究員は、ECの形成・発展過程と多国籍企業の成長との関連について、過去に行なった研究を基礎として、次のような問題について研究している。すなわち、1958年に欧州経済共同体（EEC：6ヶ国加盟）が結成され、ヨーロッパに巨大な自由共同市場が形成されると共に、域内関税の撤廃、域外共通関税の制定が行なわれた。これによってEC諸国間の貿易が自由化され活発に行なわれるようになり、また、アメリカ企業のEC諸国への直接投資（多国籍化）が盛んに行なわれるようになった。このことがアメリカ企業の多国籍企業化を推進させる端緒となり、さらに、この傾向が世界的に拡大され、多国籍企業の世界的発展を促進することとなった。1960年代に入って、EC諸国の経済発展が促進されるとともにその市場も拡大され、EC諸国内の企業も拡大・発展し、アメリカ等への多国籍化を盛んに行なうようになった。このことがアメリカとEC諸国との間の相互投資・相互貿易を活発にし、欧米諸国の国際市場化を推進させることとなった。最近になって、日本企業のEC諸国への多国籍化も次第に多くなってきており、日本とEC諸国との貿易摩擦の解消への努力も行なわれるようになってきた。EC諸国市場における現地EC諸国企業、アメリカ企業、日本企業による激しい市場競争の展開がEC諸国の経済発展にどのように影響していくかが今後の問題として興味あるところである。

林研究員は、多国籍企業の経営戦略と労働運動、とくに国際労働運動との関連について研究している。現在、ECにおいて、欧州株式会社設立実現のための制度上の諸整備に関する計画、議論が進行中であるが、その中で労資共同決定がどのように位置づけられ、どのようなかたちで実現されることが目差されているかということは、多国籍企業の活動に対応した国際労働運動全般のあり方、将来像を考える上で極めて大きな意味を有している。そこで、目下、一般的な多国籍企業論の視座を中心として、ECでの上述の計画、議論の進展を追跡しており、国内資料リストの整備を経て、徐々にEC現地資料、情報の獲得を為すべく、現地の関連諸機関と連

絡をとりつつあるところである。

山口研究員は、主として、EC 諸国内における結合企業の会計法規制問題を取り上げているが、EC 委員会より理事会へ提案され、1983年8月3日理事会制定した第7号指令「連結計算書類」をめぐる研究をし、連結計算書類作成の要件と連結計算書の作成、連結年次報告書、連結計算書類の監査と公告等の観点から研究しており、目下同指令の訳出作業中である。

以上が各研究員の研究経過概要である。

昭和59年11月14日付で正式に出発した当研究チームは、今年度においては、もっぱら各自の研究課題

を自主的に推進すべく、資料収集を中心に作業を進めてきた。したがって、予算面では極力節約して、昭和60年度に集中的に使用することにした。昭和60年5月18日から約2～3週間、EC加盟国へ出張して、各国が自国の企業経営と政府規制とをどのように運営しかつ調整しているかについて実際に関係諸国へ出向き、大学・研究所、政府機関等を訪問して資料収集する予定である。現在、訪問先と個別に事務折衝している段階であり、また、5月26日～29日には、ハノーバーで開催予定の経営経済学会へも出席して関係する研究者と面談することも計画している。以上

昭和60年度研究課題および研究チーム

<研究所委員会企画のもの>

アメリカの社会と文化：世紀転換期のアメリカ社会の構造分析

●研究の概要と特色

アメリカの社会と文化の総合的把握を試みる。とりわけ「現代アメリカ社会」を理解するためには不可欠の前提とされる世紀転換期(1900年代初期)のアメリカについて、その社会、文学、政治、法律および経済等の構造分析を統一テーマとして設定する。従来単分野の視点から論じられることの多かったこのテーマに、専門を異にする研究者の参加を得て、より立体的でトータルな「アメリカ学」の確立を試みる。

たんに個別研究を寄せ集めるだけでなく、相互批判活動を通じて、きわめて高いレベルの学際的総合研究となるよう心掛ける。そのために日外国人研究者(たとえばイリノイセンター所長)や在米研究歴があり、その専門領域に詳しい研究者との研究交流をおこなう。

●研究チームと研究の分担(○印は研究幹事)

鶴見 潔(経営)金融論からみた1900年代初期米国

河田潤一(法)1900年代初期米国の政治文化

森田三郎(文)20世紀初期アメリカの社会

○丸田 隆(法)ソーシャルダーウィニズムと1900
年初期法学

井川真砂(文)マックレイカーズの世界

<公募によるもの>

(I) 18世紀ヨーロッパの社会と思想

●研究の概要と特色

1981年後期、本学において「18世紀ヨーロッパの思想」を主題とする総合科目が開講された。今回申請の本研究は、この総合科目担当者の中、常に研究上の連絡をとり合い、共同研究を続けてきた数名のメンバーを中心とし、これに新進の研究者を加え、さらに視野を拡大して上記のテーマを研究するものである。すなわち、18世紀ヨーロッパ、とくにフランス、ドイツおよびイギリスについて、それぞれの社会と、またそこに展開される思想を、それぞれの個性ならびに相互の連関に注目しながら、19世紀以降の近・現代社会の意味を問い直すという観点から研究しようとする。

かつて戦後日本のある時期、「封建制から資本制への移行」なる問題意識の下に18世紀ヨーロッパ史が活発に研究された。しかしそれらは社会経済史的側面や市民革命論に余りに偏っていたと思われる。この反省の上に、本研究は、18世紀ヨーロッパの社会と思想が、長期的に見て、その後の工業化社会とどのように連結し、また断絶するのかをトータルな観点から解明しようとする特色をもつ。

上記の長期的トレンド観察、経済決定論を排するという研究方法は、歴史学、政治学、経済学さらには社会

学、人類学的アプローチを交錯させることを要求する。本研究チームの各メンバーは、それぞれ個別の研究関心と成果をもちながら、このような問題意識を共有している。したがって各メンバーの専門分野の圏内をこえて、総合研究を行う必要性と可能性がある。

●研究チームと研究の分担（○印は研究幹事）

前川貞次郎（文）フランス啓蒙の歴史思想
小笠原弘親（大市大法）フランス啓蒙の政治思想
黒田忠史（法）ドイツ啓蒙期の政治構造

田中秀夫（経）スコットランド啓蒙の歴史思想
○山口和男（経）ドイツ啓蒙と歴史主義の源流

（Ⅱ）シンボルと元型に関する研究

●研究の概要と特色

本研究は、C. G. Jung の思想に基づいてシンボル収集を行なった資料、ARAS(The Archive for Research in Archetypal Symbolism) の業績を参考に、シンボル研究を行なうものである。Jung によれば、人類共通の普遍的無意識 (collective unconscious) の層から表現された、元型的 (archetypal) シンボルは、人間のあらゆる表現活動の中で見出されうるものであり、芸術、宗教、物語など様々の領域において、また異った時代や地域において共通のシンボルが重要な位置をしめている。そこで本研究では、様々の学問領域におけるシンボル理解を比較検討すると共に、Jung の思想などを手がかりに、それぞれの方法論を越えた、共通の視点を見出していくことを目的とする。その中で、具体的な作業として、西洋及び東洋のシンボルを収集し、比較分析を行なうことによって、その元型的な意味を探っていくことを行なう。

シンボルについては、すでに個々の学問分野において考察の対象とされたり、個々のシンボルについて詳しく検討されたりしているが、それらを総合する試みは少ない。本研究は、シンボルを中心的なテーマに選び、学際的に研究することによって共通の視点を探り、人間の表現活動の根源を探るところに特色がある。

シンボルは、歴史、芸術、文学、宗教、哲学、心理学など、様々の領域に見られるものであり、それら諸領域の学問から総合的に研究することが必要である。さらに、シンボルを通じて、共通の観点を見出していくことは、それぞれの領域に寄与することも大きいと思われる。

●研究チームと研究の分担（○印は研究幹事）

井上忠司（文）生活文化、社会心理学
上村邦子（文）神話
岡田康伸（文）ユング心理学
衣笠 茂（文）ギリシャ、世界史
高阪 薫（文）沖縄、近代文学
谷口文章（文）哲学
谷本泰三（文）アメリカ文学
寺島樵一（文）日本古典文学、芸術
西田英樹（文）ドイツ文学、イメージの深層
久武哲也（文）地理学、砂絵
○藤岡喜愛（文）精神人類学

堀 直（文）アジア史、民話
松尾恒子（文）ユング心理学
森 茂起（文）ユング心理学
デビッド・ライクロフト（文）シェークスピア、
フォークテイル
上原 輝男（玉川学園）国文学、心意伝承
加藤隆久（神戸女子大学）国学
河合隼雄（京都大学）ユング心理学
樋口和彦（同志社大学）神学、ユング心理学
和田邦平（歴史博物館）日本文化史

《総合研究所人事異動》

杉原四郎所長が3月31日付で定年退職されるのに伴い、後任所長には理学部の日下譲教授が、また、法学部選出委員笹井昭夫教授が法学部長に、文学部選出委員西田英樹教授が学生部長に就任されるに伴い、法学部選出委員には藤田宏郎教授が、文学部選出委員には井上忠司教授が、それぞれ4月1日付で就任される。